

今週の為替相場見通し(2024年11月18日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		152.62 ~ 156.76	154.17	152.00 ~ 158.00
ユーロ	(ドル)		1.0496 ~ 1.0728	1.0541	1.0380 ~ 1.0640
(1ユーロ=)	(円)		162.33 ~ 165.03	162.70	160.50 ~ 165.50
英ポンド	(ドル)		1.2598 ~ 1.2925	1.2619	1.2200 ~ 1.2800
(1英ポンド=)	(円)	*	194.30 ~ 198.46	194.76	190.00 ~ 200.00
豪ドル	(ドル)		0.6441 ~ 0.6598	0.6465	0.6350 ~ 0.6550
(1豪ドル=)	(円)	*	99.42 ~ 101.36	99.74	98.00 ~ 102.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替デリバティブチーム 岩下 義明

(1)今週の予想レンジ: 152.00 ~ 158.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

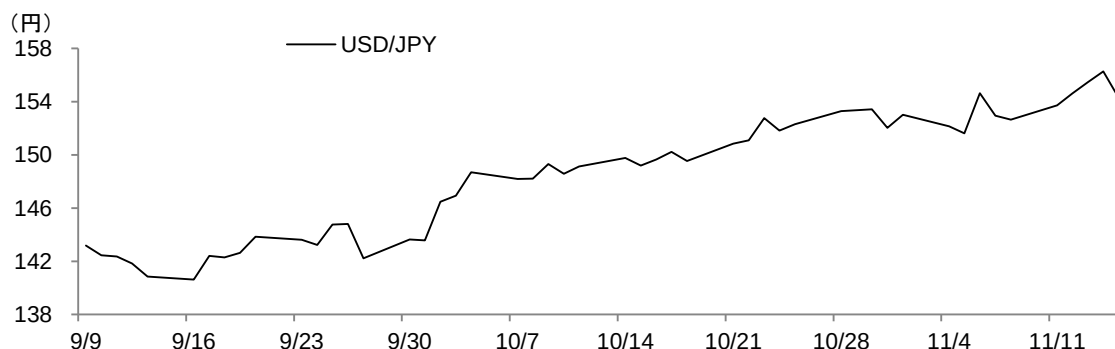
11日、ドル/円は152.97円でオープンし、前週末のFed高官の発言を受けたドル買いで上昇。その後は米国市場休場で目立った材料がない中153円台後半で推移。12日、東京時間のドル/円は午前中に米共和党が下院でも過半数を獲得することが確実との報道を受けるとドルが買われ154.05円まで上昇。その後は軟調なアジア株とともに下落したものの、米金利の上昇を受けて再び上昇し154.92円まで値を伸ばした。13日、東京時間はドル高トレンド継続で155円を上抜けて推移。事前に強い結果が出ることを警戒されていたためか、米10月CPIが予想一致となったことを受けて一時ドル/円は下落したものの、その後は活発な社債発行が米金利の上昇材料となり、ドル/円も上昇し一時155.63円をつけた。14日、155円を超えても日本の当局者から為替市場への警戒感が聞かれなかったことからドル/円は続伸し、156円を突破。米国時間にはパウエルFRB議長が「利下げを急ぐ必要はない」と発言したことから米国年内利下げ織り込みの低下と共にドル高となった。15日、東京時間は前日からのドル買い継続で週高値の156.76円をつけるも、その後はドル売り地合いとなり反落。米10月小売売上高や米10月鉱工業生産が予想対比堅調であったことから一時戻すものの、その後は米金利低下に合わせて下落し、154.17円で越週。

今週のドル/円は底堅い推移を見込む。相場を切り返すほどの大きな材料がない中、トランプ次期政権による財政拡張・インフレ再燃懸念からトランプトレード継続によるドル高が続くだろう。直近の円高局面だと縮小していた投機勢の円ショートポジションも順調に復活しており、市場はさらなる円安ビューへと傾いているように見える。ドル/円の為替介入の水準として意識されるのが160円近辺であろうが、現在は米国の強気の経済見通しに基づいたファンダメンタルズに沿った円安であり、トランプ次期大統領もドル高を容認していることから積極的に為替介入を実施しにくい地合いと思われる。とはいえそれを見越して円売りが急速に入れば、ファンダメンタルズに沿った安定的な動きではないとして本邦当局が為替介入へと踏み切る可能性がある。160円手前まで口先介入をいなしながらドル高により徐々にドル/円が上昇していく動きが基本シナリオか。今週の注目経済指標は19日(火)の米10月建設許可/住宅着工件数、20日(水)の本邦10月貿易収支、22日(金)の米11月製造業/非製造業PMI(速報)と米11月シシガン大学消費者マインド(確報)である。

(3)先週までの相場の推移

先週(11/11~11/15)の値動き:

安値 152.62 円 高値 156.76 円 終値 154.17 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 グローバルFIチーム 田川 順也

(1) 今週の予想レンジ: 1.0380 ~ 1.0640 160.50 ~ 165.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

11月11日週のユーロ/ドルは下落した。1.0713で週初東京マーケットをオープン、直後につけた1.0728が週間高値に。海外市場では欧州株の調整を見ながらユーロ/ドルも軟調推移。12日は日本時間昼頃から小幅軟調、独11月ZEW指数の期待・現況が事前予想を下回り、NY時間では米国債利回りが上昇したことも相まってユーロ/ドルは1.0600の大口を割り込む。水曜日は横ばい推移後、米10月消費者物価指数が発表されると当初はドル売りの反応に、ユーロ/ドルも1.0655まで買い進まれる。ただ同指標が消化されるとドル高が再開となる流れにユーロ/ドルも反落。14日はアジア時間横ばい後ロンドン時間に入ると大口1.0500を下抜け、週間安値である1.0496を示現。達成感もあり一旦は1.0580近辺へと反発も、パウエルFRB議長の発言に再度ドルが買われる展開。8日は全般的なドル売りに加え、英7~9月期GDPが事前予想を下回るとユーロ/ポンドに買いが入ったことも相まってユーロ/ドルも下支え。ただ、上昇は続かず、良好な米10月小売指標にドル買いとなり、1.0541で越週となった。

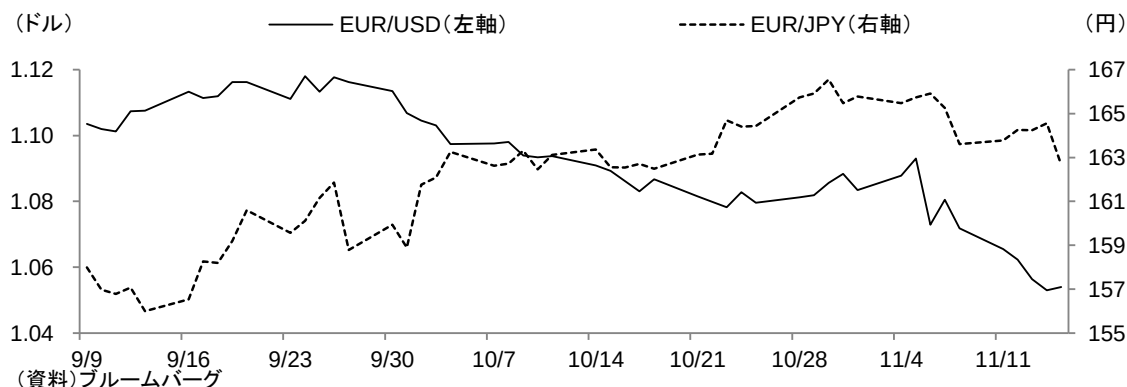
今週のユーロ/ドルは上値の重い展開を想定。9月の末に1.11台後半を付けていたことを思えば一か月半の間に6%超のまとまった幅でユーロ安が進行した。ひとえに、為替市場全体でドルが買われる中でドル高の受け皿としてユーロが選好されている。ドルが買われている背景としては、米債券利回りの上昇が筆頭材料としてあり、それに加えてトランプ次期大統領の政策により、EUの対米輸出に悪影響があることや、域内で経済規模が大きい独・仏の政治不安を起因とした景気懸念がユーロ売りを肯定している。

要因の性質を考えれば、トランプ政策の具体案が出るまでは欧州に対する関税や農産物輸入規制に対するリスクがすぐにはなくなることはないだろう。同じように欧州政局不安がすぐに解消するようなシナリオも描けず、今週すぐに動く可能性があるのは米金利上昇が止まるかどうか、という点。ただ、先週14日のパウエルFRB議長の利下げを急がないという主旨の発言や、トランプ政策の影響から米10年債5%超という予想も聞かれる。「6%も急落している値ごろ感」とか、「1.0500という水準感」といったようなことをテーマとしてユーロ/ドルを買っていくのは尚早か。今週も上値の重い展開を想定。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(11/11~11/15)の値動き:

(対ドル)	安値 1.0496	高値 1.0728	終値 1.0541
(対円)	安値 162.33	高値 165.03	終値 162.70



3. 英ポンド

欧州資金部 天沼 幹

(1) 今週の予想レンジ: 1.2200 ~ 1.2800 190.00 ~ 200.00 円

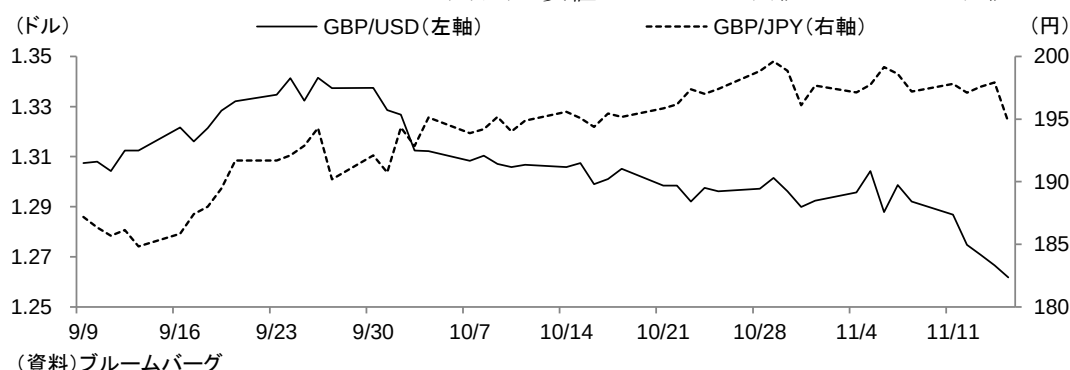
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンド相場は、前週に続き対ドルで大きく下落した。前週末、保護貿易主義者のライトハイザー氏が通商担当につくという報道が流れたことから、未だ不透明感が極めて高いものの関税政策の実現が意識される。週初からトランプトレードが再開し、全面的にドル高基調でオープンした。12日は英9月雇用統計が発表され、失業率が予想を上回ったことで利下げ織り込みが若干拡大しポンド売りが加速。13日午前は米10月CPIを控えてドル売り調整となり、ダウンスайдに歪んでいた市場予想とインラインの結果が出るとドル売りリスクオンで反応した。OIS市場での米12月利下げ織り込みは50%レベルから66%レベルまで進むも、前回9月と比較して上昇幅は拡大しており未だ据え置き余地も十分残されている。ドル売りは長くは続かずドル高基調に戻り、翌14日も一層のドル買いでオープン。午後にユーロ/ドルが1.0500を割り込んだところで英ポンドも1.2630レベルで反発し、1日のトータルで見れば若干のポンド安で引けた。またパウエルFRB議長が「利下げを急ぐ必要性はない」との認識を示したことで利下げ織り込みは再度44%レベルまで後退した。15日は英7~9月期GDPが前期対比で予想を下振れ、対ユーロで急落した一方、対ドルではあまり動かなかった。

今週は、20日(水)に英10月CPI、22日(金)に米・英10月PMIが控えている。英短期金利は4.30レベルで推移しており、BOEへの利下げ織り込みはECBやFEDに比べて控えめ。BOEもインフレについて底堅い推移を想定しているようだが、前回の英CPIは下振れており、今回も英PPIを基準に下振れる見方が少しずつ増えている。特にサービスにおいてレクリエーションと賃貸が大きな影響を持っており双方ともダウンスайдは大きい。今回も前回に続けて弱含めば、利下げ織り込みは素直に進むだろう。英PMIについては、ユーロ圏では製造業で明確に50を割っている一方で英指数はこれまでのところ底堅い。BOEの利下げ頻度を占う上で、CPIと併せて今回の結果で目に見えて下振れていくかどうか注目したい。トレーダーは年末に向けてポジションのアンwindや利益確定のフローを意識しているよう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(11/11~11/15)の値動き: (対ドル) 安値 1.2598 高値 1.2925 終値 1.2619
(対円) 安値 194.30 高値 198.46 終値 194.76



4. 豪ドル

金融市場部 為替デリバティブチーム 部坂 洋太郎

(1) 今週の予想レンジ: 0.6350 ~ 0.6550 98.00 ~ 102.00 円

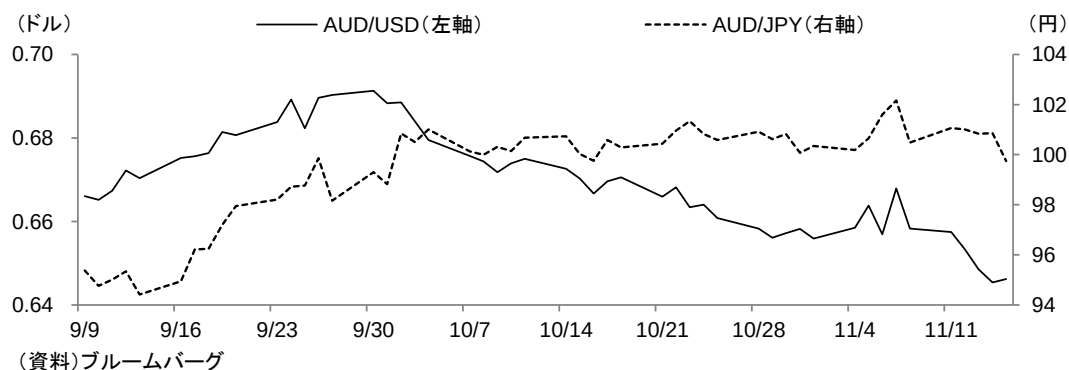
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは下落となった。週初11日の豪ドルは0.6584でオープンしたあと、米国休日で参加者も少なく方向感のない値動きの中、小幅に下落して0.6574で引けとなった。12日、豪11月消費者信頼感指数および豪10月企業信頼感指数は事前予想を上回る結果となったが特段の市場での反応はなく、トランプトレードが継続するなか豪ドルは終日じりじりと下落する展開となり、米国時間には0.6532で引けとなった。13日、豪7~9月期賃金指数は前年比・前月比ともに小幅に事前予想を下回ったことで小幅に下落となったがすぐに買い戻された。米国時間に発表された米10月CPIは市場予想通りの結果となったが、その後の米金利上昇の動きから豪ドルは0.65を割り込み、0.6485でクローズとなった。14日、豪10月雇用統計で事前予想に対して雇用者数の伸びが鈍化した結果を受けて豪ドルは下落。さらに米国時間にはパウエルFRB議長の利下げに慎重となる発言を受け週安値の0.6441まで下落して、その後は小幅に反発して引けとなった。週末の15日、米国時間に発表された米10月小売売上高は事前予想を下回ったものの米11月NY連銀製造業景気指数が予想を大きく上回ったことで、0.6443まで下落。その後は、米金利低下を受けて小幅の反発となり、0.6465で越週となった。

今週の豪ドルは、先週に引き続き軟調な展開を予想。今週は米国・豪州ともに主要な経済指標の発表が予定されていない中、引き続きドルがじりじりと買われる展開が続くと思われる。トランプ次期大統領による閣僚人事が発表となるなか、今後の米国による財政拡大の規模等の数値が明らかになるまでトレンドが変わりづらい状況と思われ市場参加者も大きくポジションを傾けづらい状況は継続する。一方で、豪ドルは、テクニカル的には0.6400が次の安値の節目となり、ドル高が進行する中で節目を下抜け出来るかどうかのポイントとなる。さらに、0.6350が豪ドルの年初来安値付近の節目となるため、0.6350付近では更なる一段のドル買・豪ドル売の材料がないと下抜けするのは難しいと予想する。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(11/11~11/15)の値動き: (対ドル) 安値 0.6441 高値 0.6598 終値 0.6465
(対円) 安値 99.42 高値 101.36 終値 99.74



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。